

村上 千里 (NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議事務局長)

Theme Talk キーワードはESD！持続可能な社会をつくるための教育をはじめよう。

■社会の問題を解決するために環境教育はどうあるべきかをテーマに

きょうはコンセプト・プログラム開発会議のしめくりとして、これまでばらばらに行われてきた開発教育、環境教育、ボランティア教育、地域づくりのための教育etcを、「ESD」つまり「持続可能な社会をつくるための教育」をキーワードにして捉えなおし、どのように持続可能な社会を紡いでいくべきかを考えていきたいというご提案をいただきました。私は現在、このESDを日本で推進していくためのネットワーク組織であるESD-J(「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議)で、どうしたらこの国でESDが広がっていくか、毎日頭を悩ませています、みなさんと議論することで、少しでも今後の方向性のヒントが見えてくればという思いで参りました。どうぞよろしくお願いいたします。

私が環境問題にかかわりはじめたのは、1992年に日本リサイクル運動市民の会に入ってからのもので、大学卒業後4年間は外資系コンピュータメーカーで営業の仕事をしていました。男女が対等に評価されそうだからという単純な理由で選んだのですが、入社してみると当時はやっていたコマース通りの「24時間働けますか」の世界。夜10時ぐらいに帰ろうとすると、「おっ、きょうは早退か」なんて言われる(笑)。仕事自体はつらくなかったんですが、次第に自分がいったい何のために夜中まで働いているのかという気持ちが膨らんできて、同じ時間を使うならもっと社会的な課題を解決していけるような仕事がしたい、と思い転職したわけなんです。

1992年といえば、リオで地球サミットが開かれた年で、新聞には毎日のように「地球温暖化」とか「オゾン層破壊」といった記事が載っていました。でもいざ自分に何ができるかを考えたり調べようとしても、当時は市民がアクセスできるセンターがどこにもなかったんですね。それなら自分たちの手で作ろうと、「ジャパンエコロジーセンター」という環境情報センターを立ち上げることにになり、その発足と運営に携わることにになりました。とはいえ、私は環境問題も勉強し始めたばかり、NGOのネットワークもないズブの素人でしたから、最初は八方ふさがりでハングアップ状態。これではいけないと出かけたのが、清里でやってた2泊3日の環境大学でした。そこで同世代の仲間や、早くから環境問題に取り組んできた先人たち、私が所属していた問題追求型のNGOとはひと味ちがう環境教育系のNGOの人たちと出会い、大いに触発され、環境教育にも関心が広がっていったのです。

でも自然のなかでやる環境教育と、東京などの大都市で向き合わざるをえない環境問題とのギャップも痛感し、都会生活の中の環境問題をテーマにした環境教育も必要だろうと、清里で出会った仲間達と「都市環境教育研究会」という小さなサークルをつくって、勉強会を進めながら、社会の問題を解決するために環境教育はどうあるべきかを考えてきました。その後環境省が「地球環境パートナーシッププラザ」をつくるときに、その企画と立ち上げにかかわり、行政と市民の協働をテーマに仕事をきて、5年ぐらい前にフリーに。そして現在は、「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)の事務局で、NGOのネットワークづくりとESD-Jの団体としての活動づくりに取り組んでおります。

■ヨハネスブルグサミットで政府とNGOが提案

さて、そのESDですが、Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)の頭文字を取ったもので、「Education=教育」「Sustainable=持続可能」「Development=開発」と、それぞれ議論が多く、かつ、わかりにくい言葉が3つも連なっているで、いったい何のことなのかチンプンカンプンという反応も多いんですが、それぞれが思いのこもった言葉でもあるんですね。

そもそも、2002年9月のヨハネスブルグサミットで日本政府がNGOとともに2005年からの10年間で「持続可能な開発のための教育の10年」と位置づけようと提案したもので、同年の国連総会で採択されました。国連の「××の10年」というのは、これまでも「開発の10年」とか「障害者のための10年」などいろいろあって、国際的な課題に対して全世界で解決のために取り組んで大きなムーブメントにしていこうという「10年間の国連プロジェクト」なんです。このなかで、1976年～85年の「婦人の10年」は、女子差別撤廃条約批准、男女雇用機会均等法へとつながり、日本社会に大きなインパクトを与えました。このときは、婦人運動に取り組んでいた市民グループが政府に批准を働きかけるなど活発な運動を展開して日本社会の変革に大きな追い風となったそうです。この頃私は小学生だったんですが、男まさりだったので、「ウーマンリブだ」なんてからかわれたりしましたが、小学生にも女性の権利獲得運動の空気が伝わるほど、大きなうねりとなっていたんですね。

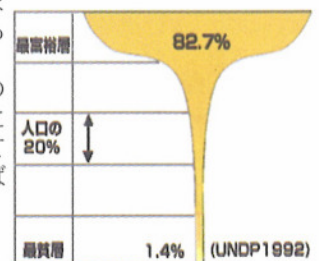
ちなみに、2003年からは「国連識字の10年」がスタートしていますし、2005年からは「命のための水の10年」、10年プロジェクトとは別に「国際年」というのもあって、2005年は「国際マイクログレジット年」「スポーツと体育の国際年」「世界物理年」と、これまたたくさんある。この中に埋もれないよう、国連のプロジェクトであるということをもっと活かしながら、世界を変革するうねりにつなげていきたいと思っています。

■富が偏在し、膨大なエネルギーを使う持続不可能な社会

ところで、みなさんご存じのように、ESDのなかのSustainable Development、持続可能な開発という言葉は、「環境と開発に関する世界委員会」(ブルントラント委員会)が1987年に公表した「Our Common Future」という報告書で取り上げた概念です。持続可能な開発とは、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」をいい、「すべての人々に基本的なニーズの充足と、よりよい生活を求める向上心を実現する機会を保障する」もの。つまり、「環境」と「開発」とを互いに反するものではなく共存し得るものとしてとらえ、(1)将来世代にツケを回すことなく、環境保全を考慮して節度ある開発をしていくこと、(2)現在の、富裕な一握りの国と貧しい国との格差を解決していくことの必要性を訴えたものです。

私たちの住む世界は、いまや「1秒間に大型トラック63台分、252トンの化石燃料が使用され、テニスコート20面分、5100平方メートルの天然林が消失し、テレビが4.2台も生産」(山本良一監修『1秒の世界』より)されています。このように化石燃料と地球の資源を使い大量生産・大量消費を続けているために、地球にはもはや人類の発展を支えるだけのキャパシティがなくなっています。

ところが、世界の富の分配の構造を見ると、世界人口の20%が82.7%の富を所有し、最富裕層の20%が1.4%をわけあっている状況。つまり、最富裕層がたくさんのエネルギーを消費し、環境にダメージを与え、その結果気候変動が起き、最貧層の森林が破壊されたり洪水がひきおこされてしまうというきわめて理不尽な状況がある。私たちはこういった困難な課題を解決していかなければならないわけなんです。



■持続可能な社会とは何かをともに考え、つくりあげていくための教育

そういった課題にコミットしていく人を育てるのがESDです。「持続可能な社会」という姿があらかじめあって、それを学ぶ

のがESDではなく、どんな社会をつくらたいのか？いろいろな要素を考えあわせながら、さまざまな考えをもつ多くの人たちがつくりあげていく。そんな活動を続けていくことそれ自体がESDなんです。つまり、従来の教育のように、何々を修得すればそれでおしまいではなく、正解があるわけではない。だから、先生から生徒に一方通行で教えることはできないんですね。よりよい社会をつくらたいにはどうしたらよいかを、地域地域に暮らしている人たちが、それぞれに考え、見つけ、それを社会のしくみとしてつくりあげていく。学び方のスタイルも、「教える人」と「教えられる人」が固定しているのではなく、お互いに学びあう関係、そしてその学びあいをサポートするファシリテーターという役割が重要になってくる。

たとえばリサイクルを推進するために、ゲームなどでごみの分別方法を教えるアクティビティがありますが、それがほんとうに環境教育かと考えてみると、実はそれは単なるマナー教育であり、しつけにすぎないと思ってしまう。単にそのゲームだけで終わるのではなく、なぜこんなにごみが出るのだろう？ 本当にこれだけのものが必要なのか？ ごみが集められたあとは、どこに行ってしまうのだろう？などといういろいろなことを知ることで、では根本的にごみを減らすにはどうしたらいいかを考えていく。分別だけが解決策だと思っていたら、現在の大量消費社会を変えることなんてできませんよね。その背景にあるさまざまな事情や関連性を学びながら、こどもも大人も一緒になってごみ問題をどうして解決していけばいいのかを探っていく。そこにつながってこそ環境教育だし、ESDと呼べるのだと思います。

■社会参画につながる学び

いま環境教育とESDの共通点を述べましたが、たとえば人権教育などでも同様で、単に知識として人種差別はいけないと教えるのではなく、自分が自分として生きていくために相手も尊重していくことが必要だという個人の気づきからスタートして、それがうまくいっていないとしたら、社会のどこに問題があるのか、どうやってそのしくみを変えていくべきかを考えていく。ここでも、そういった活動にコミットする人を育てることが求められているわけですね。

つまり、環境教育も人権教育も開発教育も平和教育も、答えを教えるのではなく、問題を解決する力を育むことが目的。「自分たちの教育活動の中で大切にしていたことってこれだったよね」という根っこの部分はそれぞれ重なり合ってくるのではないかな。だから、環境や人権、平和…と、入口は別々でも、個別のテーマを掘り下げていくことで、他の分野の課題も見えてくるし、その課題の解決策を考えるセンスや能力は共有できるものだと思うのです。

ESDがカバーするテーマは、花のようなこの図の全体なんですけど、たとえば環境教育をやっている人が他の分野も全部カバーしなくてはいけないのではなくて、それぞれの切り口から、社会参画につながる学びが体験できればいい。それによって、人権教育も平和教育もジェンダー教育も開発教育もつながっていく。この重なる部分がESDのエッセンスです。

ESDのエッセンスには、大切にしたい価値観や育みたい力、学習方法などがあります。これらをできるだけひらきたい言葉であらわしてみると、「つなぐ力」「ともに生きる力」「参画する力」といえるでしょうか。「つなぐ力」というのは、課題のつながりに気づく力ですね。もうひとつ、いろいろな人が参画して社会をつくらたい、その主体をつなぎ、コーディネートする力も指します。「ともに生きる力」というのは、多様性を大切にしながら共生していくための力、「参画する力」とは、どんな社会にしていきたいかについていろいろな人とコミュニケーションしながら、主体的に興味をもってかかわっていく力。そして、これを実現するための教育のひとつが、参加・体験型学習だと思います。とはいえ、先ほどお話したごみ分別ゲームのように、まだまだ形式的な参加にとどまっていて、本当の社会参画をうみだすものになっていないものが多い、そこが「残念！」というところですね。

地域のなかには、まちづくり、こども、外国人、地場産業、福祉etcとさまざまなテーマがあります。お互いの興味・関心を選び出し、より楽しく、暮らしやすく、社会的に公正であるような社会にしていこうためにはどうしたらいいか？ それぞれの課題に取り組んでいくためのリソースも、地域にはたくさんあります。地域発でESDを推進していくさいに、NPOや市民グループが主役になる場面はこれからますます広がっていくでしょう。

ESDはまったく新しい概念として、ポツと誕生してこれまでの成果をチャラにして一からスタートするというものではなく、これまでなされてきた多くの取り組みや得られた成果を土台にして、さらに大きな力に育てていく推進力になればと考えています。

Session 村上千里・川嶋直・中西紹一・茶原真佐子・池上博身・青木将幸

■Session1 ESDをわかりやすく伝えるコミュニケーションキーワード

青木 ESDとは何かについて村上さんにまとめていただきました。わかりやすく整理して話していただいて、だいぶESDとは何かが見えやすくなったかなという感じはしますが、みなさんはいかがですか。

川嶋 ぼく自身、ESD-Jの立ち上げにもかわかり、いまでも理事をやっている、ここ2年ぐらいESDという言葉がずっと頭の隅にあるんだけど、やっぱりESDという言葉はわかりにくいですね。「持続可能な開発のための教育」と訳しているけど、「教育」という言葉がどこにかかっているのか？ あえて開くとすると『持続可能な社会を実現するための開発』という行為をするための教育。いったい何のこと？って感じ。耳で聞いただけでは、意味がスッと頭に入っていない。

それともうひとつ、ヨハネスブルグサミットに向けてNGOグループの「提言フォーラム」で提案したものが、明確な青写真がバシッと決まっていたというほどではないのに、国連で採択されて、一挙に動き出すことになった。いわば、商品があるわけではないのに、先に売らなきゃいけないことが決まっていて、消費者に購買意欲もないのに、作るべきだからということでできた商品って感じなんですね。とはいっても、商品の総体としての姿カタチはまだできていないけれど、個々の部品だけはいっぱいある。ではどういう商品にすると、みんなが「あっ、これだ！」と言って買ってくれるか。上手に売るためのキーワードだけでも見つかるといいんですが…。

村上 Education for Sustainable Society(持続可能な社会のための教育)であればわかりやすいですね。あるいはEducation for Sustainabilityとか、Education for Sustainable Futureなら、ピンとくるとはいわないまでもイメージしやすい。やはりDevelopmentという用語が馴染みがないんですよ。ことに環境をやっている人にとっては、Development=開発というと、ブルドーザーで自然をガーンと切り拓くみたいなイメージがあるし、Sustainable Development という用語も、「これからまだ開発しつづけるのか」なんて疑惑の目で見てしまうところがある。Development for Sustainable Society、持続可能な社会をつくらたいことが社会開発であるという意味合いなんだろうけど、「持続可能な社会」ということ自体、明文化さ



れているわけではないので、これまたわかりにくいんです。

川嶋 「Development」の日本語訳は「開発」とか、「内発的発展」ですが、開発にもハードの開発とソフトの開発があって、ソフト面の開発が社会開発、人間開発、さらに言えば、私個人が新しい状況に入っていくというニュアンス。もともと、Development = De + Envelop(封筒)で、封筒を開く、持っているものを中から引き出して、より価値のあるものにしていくという意味があるわけです。日本語で「開発」という言葉から受ける印象とかなりちがう。

中西 広告屋の習性として、ついついわかりにくいのは悪だと思ってしまうがちなんですけど、でも実は、わかりにくさの中にある種の本質があったりする。そういう意味では、わかりにくいことをうまく伝えるのって、けっこうむずかしい。シンプルにひとことで言うとなると、「持続可能社会のしくみを学ぶ場」という感じでしょうか。開発=しくみ、とひらたくしてみたんですが、やはり「開発」という用語を使わないほうが共感や賛同が得られそうです。もっとも、開発教育をやっている人たちからはクレームが来そうですね。

村上 「教育」という言葉にひっかかる人もいるんですよ。なんで「学び」ではないのか。ラーニングのほうがふさわしいって。

川嶋 そこはよく議論になるところだけど、Educationの語源は「Educe」、つまりその人の持っている能力や魅力、元気を引きだすという意味。つまり「教育」のもともとの意味がそういうものであって、おかしいのは今の教育なんだから、本来の教育に立ち返ればいい。「学習」という言葉にひよらなくたって、かまわないと思うな。

村上 DevelopがDe+Envelopということと、似ていますね。

川嶋 もうひとつ、さきほど村上さんから、ESDは、人権教育、ジェンダー教育、環境教育…などを包括していて、いずれもエッセンスは共通なんだという話が出たでしょう。そのときの入口である個々の教育って、たとえば人権教育なら人権問題、環境教育なら環境問題というふうに、それぞれの課題があって、そのテーマを「〇〇教育」といつているわけだね。つまり、その課題解決のための教育なんですね。でも開発教育といったときの開発について考えてみると、開発問題があるわけではない。開発というのはたぶん解決の手法なんですよ。

村上 開発教育で扱う課題はもともとは南北問題でしょうが、それを解決の手法・プロセスとしての開発教育と言い換えたということですね。

川嶋 ではESDは、(1)課題やテーマ、イシューを括ったものなのか、あるいは(2)教育手法や解決への筋道を括ったのかといえ、後者でしょう。つまり持続可能をさまたげる諸課題、そういったネガティブな要素を、持続可能—これは未来であり、ポジティブな世界だよ—なものにしていくための教育手法だったこと。環境問題、人権問題etcと、個々の乗組員たちはそれぞれネガを背負っているんだけど、めざすのはポジ。「～教育」という使い方にひねりがあるってこと。

青木 解決すべき課題と、めざすゴール、そのための手法をごっちゃにして使っていることがわかりにくい点であると。

川嶋 そう。わかりにくくなっている原因が整理できたから、じゃどうなんだって話だけ。

中西 私がこのESDという概念を整理していくなかでもっとも重要でかつむずかしいなと思ったのは、正解のないなかで教えていかなきゃいけないということ。正解がないというのは、成果をベンチマークできないってことでしょう。これまでの教育だったら、試験をやって点数をつけて合格不合格を決められた。モノづくりにしても、他社の製品と比べてどこがダメでどこが優れているかを評価していくわけですね。それがESDにはない。

村上 いま各地でESDを考えようといった趣旨のミーティングを開いていて、そこで最初にやる作業が、私たちが望む「持続可能な社会」ってどんな社会だろうと、みんなで「〇〇が××な社会」という言葉にして出しあいながらイメージをかたちづくること。そして、それをつくるためにどんな教育が必要なのかを考えていくんですが、めざす社会すら自分たちで考えていくものなんだというところが、メッセージがわかりづらくなっている一因なのかもしれない。でも、めざす社会って与えられるものなんだろう？ 自分たちで考え、お互いに望む社会のイメージを出しあって共有していきながら、みんなで自分たちが望む社会をつくっていきよ、というのがメッセージでもあるんです。

茶原 自分なりに思ったのは、問題の大小や、声の大きい小さいは別にして、日ごろからどうしたらいいだろう？ なぜだろう？ と思っていることを、自分の心の中で思っているだけでは社会は変わらないけど、声に出して、いろいろな人と話し合ったり考えたりしていくことがESDになるというイメージなんです。小さいことでも行動していく。それならふつうに暮らしている私たちでも何かできそうな気がする。

村上 言葉がもつイメージって大きくて、ESDというと、偉そうだったり、勉強した人しか使っちゃいけないようなイメージがつきまわってしまう。でも実現したいことって、暮らしの中にいっぱいあるよねってことですね。

川嶋 キーは社会とのかかわり方。こうやって社会とかかわろうよ。そのキーワードとして、「参画」とか、「体験型教育」などが出てくるわけですね。

中西 イメージでいうと、地球市民教育というか、地球の持続可能性を担保していくための市民教育。国籍や肌の色、宗教も違うけれどサスティナブルをめざすという意味では共通のプラットフォームがあって、そういう人たちが育っていくことが大切だと。最終的にめざすところはそういうことなんだろうけど、「地球市民」などという、20年以上も前の言葉のようで、ユートピア的なイメージがあって、言ってるほうが恥ずかしい感じがする。

村上 でもしっくりは来ますよね。持続可能な社会の形って、地域特性や文化、風土とも関連してくるから、決してひとつじゃない。でも持続可能な社会に向かって個々の現場で環境や人権や平和など足元の課題に取り組んでいく中で、実践と学習がスパイラルアップしていく。そのプロセスがESDだということでしょうか。

■Session2 ESDを推進していくために—ESD—Jのミッション

青木 これまでの議論で、ESDとは何かについての共通理解はできたように思います。では、このESDを推進していくためにどうしたらいいか。中西さんが議論のポイントを整理してくださったので、それをうかがいましょう。

中西 まだ十分に整理しきれていないところもあるし、さきほどの議論と重なる部分もありますが、ペーパーに沿ってお話しますね。

まずESDとは、ひとことで言うと「持続可能な社会のしくみを学ぶ地球市民教育」。言葉や宗教、目や肌の色の違いを超えて、ひとつの目標に向かって方向付けをしていくための教育で、このとき、社会・経済・環境のトリプルボトムラインが重要だということ自分で定義してみたんです。

ではESDはOSなのかアプリケーションなのか？ つまり理念に限りなく近いのか、それとも現場を想定して応用していくソフトなのか、ポジショニングマップにしたのがこの表です。縦軸に理念—実践を、横軸にOS—アプリをとってみると、理念についてはOSに当たる部分は国連が全体像を掲げていて、その理念を自分の国や地域に落とし込むのがそれぞれの国の政府や地域の行政だろうと。OSをベースに実施計画をつくっていくのがユネスコ。各国や地域など個々の事情に応じた実践ソフトをつくっていくのがESD—Jですね。

次に、ESDは従来の教育とどこが違うのか？ 学校教育でよく使われる表現に、「総括的評価(Summative Evaluation)」と「形式的評価(Formative Evaluation)」があります。総括的評価というのは、学習の最後にテストをするなどして評定を与える

こと。またモノづくりなどでいえば、道具の使いやすさの比較対照評価などが該当します。一方の形成的評価は、学習の活動経過を評価し、検証することで前に進んでいくもの。モノづくりでは道具の使いやすさのデザインなどに相当し、インターフェースをつくる時は、こちらのほうが重要なんですね。その点、ESDは形成的アプローチで、結果を必ずしもともなわない永続的なアクティビティといえるのではないかと。

同志社女子大学の田田信行先生は、これからの教育に必要なのは「3Ex」だとおっしゃっています。Explore, Express, Exchange, すなわち「探究」「表現」「交流」すること。持続可能な社会を学ぶ場としてのESDに求められることも3Exでしょう。

ここでの教育は、人間と人間の学びの場であり、現場から出てくる知恵をいい形で共有することが重要だと思うんです。つまり、Creation, Presentation, Reflection、「つくって」「さらして」「ふりかえる」。これを繰り返してできあがった知恵やノウハウを集積していくことが、ESD-Jの役割だろうと思います。そして最終的には、グローバルに持続可能教育はどうあるべきかのプログラムを提供していく。当然、プログラムを単に翻訳するだけではうまくいかない。トヨタがクルマを世界に提供していくときに、適時・適地・適車を鉄則としたように、その地域や国にふさわしい持続可能教育を定着させていくのが使命でしょう。

さきほど教育か学びかという議論がありましたが、地域にふさわしいアプリケーションにしていく場面においては、やはりラーニングという言葉がふさわしいと思います。持続可能な社会をつくっていくために、世界の学びをデザインしていく。大きくいえば、それがESD-Jのミッション。また、エコのもりでの実践を、世界に通用していくものとして育て、発信していくことができれば、これもまたすばらしいと思います。

青木 ありがとうございます。世界や各地域の学びをデザインするのがESD-Jの役割ということですが、村上さん、いかがですか。

村上 OSとアプリケーション、理念と実践はかなり似通った軸なので、この4象限で説明するのは難しい気がします。また、今はOS=理念自体も国連にお任せ、というのではなく、一緒に考えていくものだと思います。

ところで日本としてESDで何をしていくかについては、2つあるんですね。ひとつは開発途上国との教育協力の視点。従来の教育ODAは学校建設や高等教育の指導者教育が中心だった。教育にアクセスできない人たちにハードを提供すること以外に効果的にアプローチできないという批判もあったんですね。もっとそれぞれの国にふさわしいソフト面での協力が必要だということで、NGOと連携しながら各国のESDに貢献することが求められています。

もうひとつは、国内の教育の視点。日本自身が持続可能な社会かということそうではない。いまの日本の教育をどうしていくかということ。きょう私がお話したのは、もっぱら後者の視点です。

では国内のESDを推進するためにESD-Jはどうあるべきか？ 自分たちが主体になってプログラムを提供していくのか、あるいはさまざまなセクターが学びに関わっていくためのプラットフォームまたはインターメディアリーでいくのか。ESD-Jは、おそらく後者だろうな、と。

川嶋 プログラムを直接デザインするのか、プログラムが生まれるような場をつくったり、あるいは交流して新しいプログラムの生まれる状況をサポートするのかといえば、やはりサポートが仕事。アンブレラ組織の常として、他の団体でできることはやらないということなんですね。

中西 ESDについてもまだ何をしたいかわからないという状況でしょ。そのときに重要なのは、入口をつくってあげることなんです。プログラム全部の面倒をみる必要はなくて、ドアノッカーでいい。ここで重要なのは入口。広告商売でもプランニングの鉄則は「入口を間違えるな」ということです。だから、ESD-Jは学びのデザインの先導役となって入口をつくる。そこから先のプログラムは、いろいろな分野の専門の方がやっていけばいいと思います。

村上 人権や環境など、各教育分野のさまざまなプログラムの幅のなかで、これってESDに近いよねというものを紹介していくことはESD-Jの役割のひとつだと考えています。

川嶋 いろいろな事例を集めてESDのトピックや手法をみんなが使える道具にしていくのがESD-Jの仕事だというのはたしかにその通りなんです。ではこの10年を、環境も人権もすべてESDです、ってことだけで通せるか？ やはりESD研究所みたいなものをつくってプログラム開発していき、どんどん成果を上げていくことも一方では必要ではないかという気もするんですね。

中西 プログラムをつくる主体なのか、つなぐ主体なのかは走りながら考えればいと思うんですよ。ふだんは各地域のNGOやNPOの活動の情報を集積していても、では中国の環境問題を解決していくための教育が必要だとすると、それまでの活動事例からいいリソースをチョイスして、現地にあわせた形のプログラムとしていく。そういう貢献はやはりESD-Jのミッションではないでしょうか。

村上 学びの場をデザインするのを応援するのがESD-Jの役割で、推進していくためには先進事例を生み出すことが必要だし、それをつくるプロセスでは実施主体になることもあっていいかもしれませんね。

■Session3 各地域にESDをひろげよう

青木 これまでの議論で、ESDとは何かやESD-Jの役割については整理ができたように思います。では、各地域での学びをどうデザインしていくか。それを担う人をどう育てていったらいいのかについてはいかがでしょう。

村上 地域の学びを担っていくのは、やはり地域の人。地域には、農家や職人さん、さまざまな分野の専門家、福祉や地域活動を担ってきたNPOをはじめいろいろな能力をもった人がたくさんいるし、里山や海や川などの自然、商店、工場、施設といったフィールドもある。例えばそういう人たちが、学校教育にかかわり、地域のESDの事例をうみだし、また子どもたちと一緒に地域の課題を考え活動していくことが大切だと思います。そこで必要となってくるのが、学校の学習ニーズや子どもたちの関心と、地域のリソースをつなぎ、授業の場でどんなことができるかをアドバイスしていく役割の人。「私はこんなことを教えられます」と学校に直接出向いてこれられても学校は困ってしまいます。逆に魅力的な活動をしている人たち自身も、自分のしていることが学びにつながることを自覚しているわけではないですから。そういったESDコーディネーターが、図書館司書のように日本中にいるのが理想ですね。

青木 ESDコーディネーターは、地域の資源を掘り起こして必要なラーニングデザインを組み立てていく人ですね。このときの地域ってどれくらいのサイズでしょう。都道府県なのか、市町村なのか、あるいは小学校単位なのか。

村上 画一的なものでなくていいと思うんですが、少なくとも都道府県は大きすぎますね。顔の見える範囲ということでしょう。小学校の校区なんですが、コーディネーターは複数の校区を兼ねてもいいと思います。とはいえ、そのコーディネーターがなかなかいない。各県や市で、たとえば環境学習リーダー養成講座などを開いてリーダーを養成しているんですが、その人たちはアクターの勉強はしていても、地域のいろいろな人たちがアクターとなる手伝いをするための勉強はしていないことが多いですね。コーディネーターがうまく機能しているような先進事例があるといいんですが…。

川嶋 これまでのコンセプト会議でも、毎回、アクターではなくて、企画し、コーディネーターでできる人材が必要だという話になるんだけど、そこがむずかしいよね。日本中でアクターを育てるセミナーは行われているんだけど。

それに、コーディネーターでできる人をどうやって育てるのか。ぼくだって環境の話ならいいけれど、人権や平和の現場なんてわ

からないもの。全体を見渡せるセンスとネットワークが必要だし、研修などで育てるのは実にはたいへんそうだ。

村上 NPOサポートセンターとか、ボランティアセンターなどには情報が集まってくるので、そこで、Educationの視点をもった人が何年かコーディネートの実践経験を積んでいくということでしょうか。

青木 全国の小学校の数がおよそ2万3000。教員になる人が年間3万人。コーディネートするには学校の事情もよく知っている必要があるから、先生や元先生で、コーディネートの資質のある人をリクルーティングしてもいいかもしれません。

川嶋 「持続可能な開発のための教育の10年」といったときに、この10年のゴールの想定が必要なんだけど、めざす方向のひとつが、地域の学びをコーディネートする人を育てていくということでしょうね。

■Session 4 森を舞台にしたESD-エコのもりの次のステップは何か

青木 さて、第一期、第二期を通じて6年間さまざまなプログラムを行ってきたエコのもりセミナーですが、このプロジェクトが終了したあとも、トヨタの森としてのミッションは続くわけですね。考えてみれば、これまでテーマとして取り上げてきた地元学もパーマカルチャーも、ESDと言えるように思います。では次のテーマはどうあるべきか？ たとえば、先ほど話に出たコーディネーター的な人が育つようなきっかけとなるプログラムを提供するとか、豊田市が中心となってESD的な取り組みをスタートさせるための場を設けるとか、森を使った環境教育以外の、開発教育とか、ジェンダー教育などの教育の場の実験フィールドとするとか、いろいろな方向性が考えられると思います。ローカルにとどまらないとすれば、川嶋さんから出たESD研究所のようなものに対する支援もあるかもしれない。いずれにせよ、ESDのための場づくりにしたらどうかというおぼろげなイメージを持っています。みなさんのご意見をお聞かせください。

村上 豊田の地域の人たちが自身がアクターになれる場づくりをしていくというのはどうでしょうか。エコのもりのミッションが終了したときは、みんながインタープリターになって、それまで学んだことを活かして、環境教育の受け手ではなく、提供者にもなる。地域の大人たちが子どもたちに対して、森のことだけでなく、商店街の活性化の話とか、地域での学びをつくっていく…。

茶原 森遊び倶楽部では、職人の技を集積しようということで、地域のいろいろな職業の人をゲストにしたプログラムを提供しています。地域の資源を掘り起こしながら、それをうまく地域に返していくにはどうしたらいいか。まだ手探り状態なんですけれども。

池上 森遊び倶楽部は単発のプログラムですが、それを繰り返して行って、職人さんや地域の知恵を持っている人たちからさまざまな技術を学ぶプログラムを組み立てていくことも考えられますね。

村上 6~7年前にアメリカのバーモント州に出かけ、ESDの視点で調査をしたことがあります。そこでおもしろいなと思ったのは、環境学習のスキルを持ったNPOが、PTAの保護者たちにトレーニングをするんです。連続3~4回の半日プログラムでノウハウを学ぶと、子どもたちに向けて半日のプログラムが提供できる。NPOは人数が限られています、保護者がプログラムを提供できれば、来年も、再来年もプログラムを提供できる。担い手がぐんと広がるわけです。

川嶋 どうしたら担い手が広がっていくかというのはむしろ難しいですね。20年も清里で環境教育のプログラムをやってきて、どうしたらうまく地域の人たちに伝えられるんだろう？と考えることがあるんですよ。たぶん、教材を使って部屋の中でやるようなパッケージプログラムならできるんですが、自然相手となると情報量がすごく多いし臨機応変さも求められてくる。決して自分たちだけで独占しているつもりはないんだけど…。もっともそう言っていたら、いつまで経っても広がらないから、ベースとなるマインドをどう伝えていくかということかな。

村上 100点満点を期待しちゃいけないんだと思います。少なくとも、学習ってなんだろう、教育って何だろうということを考える場になる。

中西 教えるということで自分も学ぶんですよ。英語の家庭教師をやると、それまでなぜ前置詞が必要なかわからずやみくもに暗記していただけだったのが、文法の構造がわかってきて、5文型でつながらないときにくっつけるボンドの役割をしているんだなってわかる。教えることで子どもたちに逆に教えてもらったんです。教えると、なぜ彼らがわからないかを学ぶ場にもなります。きれいに教えることだけが教育ではない。ESDに可能性を感じるのは、そんな部分です。

川嶋 そういった学びあいの繰り返しが、全体で文化をつくっていくんだらうね。「教えることが楽しい」ってお父さんやお母さんが思えばしめたものだよな。

茶原 森遊び倶楽部でも、子どもたちが大きくなってもう参加できないけれど、自分たちは参加したい。お手伝いとして何かできないかという親御さんからの問い合わせがあります。そういう方の思いはすごく強いんです。

青木 教えられる立場だった人が教える側に回る。学ぶ場が逆転することで、エネルギーがぐんとあがる瞬間ってありますよね。それを上手に湧き起こっていくようなしくみをつくるってことかな。

村上 プログラムを一通り体験してしまったら、もうメニューがない…というんじゃなく、今度は自分たちで作ってみよう、提供してみようとなると、消費するだけではない、広がりが出てきますね。

中西 大人だけでなく、子どもたち自身がインタープリターになることもあっていいんじゃないかな。トヨタの森に来た子どもたちが、お父さんやお母さんに教えるわけ。教えるし、そのことを通じて自分も学ぶ。つまり学びあうことができる。それが人を育てることに直結するんじゃないかと思うんです。ESDというとチンプンカンプンだけど、子どもたちから教わるプログラムをやっています、というわけですね。いろいろな人と学びあわないと新しい時代なんてつくれない。そんなさまざまな学びあいのプログラムが提供できるといいですね。

青木 学びと教育の構造の転換ですね。

川嶋 「ESDの10年」といったときに、山の頂上を高くする作業と、裾野を広くすることが必要で、広くするには、みんなが学び、教えあう状況をつくる。何が新しいのって聞かれると、「全員が先生です」となると、先生の作法もこれまでの教育とはちがってくる。そういう新しいESD先生像や手法をできるだけシンプルに伝えたい。トヨタの森でそのための研究授業を何度か続けてやってみてもいいかもしれない。

村上 ESDとは何かを解釈していくより、まずこれがESDだ！とみんなが得心するような実践事例を見せていきたいし、そんなイメージが持てる地域をつくっていききたい。そのひとつがエコのもりで展開できればうれしいですね。

池上 そのなかで企業が何をすべきか。資金提供とプログラムの共同開発ということでしょうか。現在も地元の子どもたちへの総合学習の場という事業は展開しており、今後とも地域への貢献は続けていくつもりですが、もっと大きな範囲に向けても発信していきたいと思っています。新しいステージに向けてのヒントをいただきました。ありがとうございます。

Notes ディスカッションを終えて

ESDを日本の教育を変える追い風に！ 川嶋 直

OECDの調査で日本人の学力低下が話題になって、ゆとり教育や総合の学習の時間に大きな逆風が吹いています。でも、詰め込み教育に戻ったって、それで日本が抱えている課題を解決する力が果たして育つのだろうか？

毎年共通一次試験が終わると、問題と解答が新聞に載るけれど、僕なんか自慢じゃないけれど数学なんて0点に近いと思う。知り合いの大学の先生が、大学に受かった学生たちに、半年後にまったく同じセンター試験問題を解かせたら正解率は半分、その半年後にもう一度やったら、正解率がさらに半分になっていたと言うんです。そういうことのために、子どもたちが何千時間も費やしているわけ。それってやっぱりおかしいと思う。大人は誰も「実は私、共通一次の試験問題、ほとんど解けません」とは絶対に言わない。みんながおかしいと感じていても、この国の教育はちっとも変わらない。

本当はこうすべきじゃないかというトライをぼくたちなりに20年間やってきたんです。

ESDという言葉も、いつから誰が言い始めたのか、正確なところはつかんでいないんだけど、個人的に初めて知ったのは、7～8年前にアメリカの環境教育の団体の人が、これから大切なのは環境教育ではなくて、ESDだと言ってたんですね。環境教育とどっちがうのかを聞いたら、ぼくたちが考えている環境教育が彼らの言っている「ESD」だったわけ。

この10年は、ESD推進のために、人も予算もある程度注ぎ込まれることになるでしょう。この機運を大切に、今の教育に対するオルタナティブ(代案)をわかりやすい形で発信していけたらと考えています。

入口の伝え方が肝心 茶原真佐子

最初はすごくむずかしそうな概念で、とっつきが悪そうだと思っていました。でも、わかりやすく表現されると、急にそれなら自分でもできそうだなという気がしてくる。だから、一般の人に伝えるときも最初の入り方が大切で、誤解があったりするとうまく広がっていかない。興味や関心がバラバラな人たちに、どううまく伝えるかですね。

森遊びでも、自然の中ってなんだか怖い。靴も汚れるし…なんて敬遠していた人でも、バームクーヘンならつくってみたいとか、好奇心がそそられるものがあるって、そこから入るといつのまにかファンに変身したりする。いろいろな工夫を盛り込んでいくといいと思います。

ESDを伝える良質な教科書を作ろう！ 中西紹一

去年アメリカのコロラド州デンバーに行ったんですが、植生が貧困で牧草地しかないんですよ。彼らに里山なんて言ったってわかりっこないなあとおもったんですけど、ではそういう人たちにも里山の概念を伝えるにはどうしたらいいか？ お互いの自然観を学びあう必要がありますよね。そういう学びあいを育てていくのがESDだと思います。

ESDを自分なりに「持続可能な社会のしくみを学ぶ地球市民教育」と定義してみましたが、それを伝える教科書があるといい。子どもたちが学校に入学するとき、教科書に憧れがありますよね。別に本じゃなくてもいい。映像でも、段ボールでできた何かでもいいんですが、わくわくするような、学ぶエネルギーが出てくるようなもの。

「Remind Me」という、ノルウェー出身のロイクソップというバンドのミュージックビデオがあるんですが、朝起きてから食事をしてオフィスに出かけて…という、一市民の生活をシミュレーションしてつながりを解剖した映像で、これを見ると、世界のつながりや食物連鎖がパッとわかる。ユビキタスの概念を伝えるビデオでもすぐれもので、とてもつくりがうまいんです。そんな良質なESDの教科書をつくりたいし、出てくる予感があります。

私たちの学びをどうデザインしていくかが、エコのもりセミナーの6年間のテーマだった 池上傳身

今回のコンセプト会議では、たとえば、裾野を広げる、学びあう場づくり、地域の学び、課題への主体的な関わりなど、自らを高めつつ、社会の課題を解決していくために必要な沢山のキーワードをいただけたと思います。

さらに言えば、6年あまりのエコのもりセミナーのあらゆる局面が、私たちにとっての学びをどうデザインしていくべきかという問いに対する一つの答えでもあったという気がします。

様々な課題に対応するためには、高度な専門性とともにお互いに学びあうための仕組みや場づくりが必要となります。そういったことを、これからの社会貢献プログラムの企画や開発に生かすよう心がけたいと思います。

目指す社会について語ろう 青木将幸

今回のお話の中で、もっとも印象に残ったのは、村上さんやESD-Jが「持続可能な社会」という定義を伝えて、そこに必要な教育を提供するのではなく、「私たちが目指す社会はどんな社会でしょうか？」というところから、いっしょに議論してESDというのをつくっているということ。自分たちが目指す社会について語り合い、ともにつくってゆくプロセスこそが大切だと思います。

社会が混迷し、教育の変革が求められているいまだからこそ、ESDをきっかけにじっくりと「私たちが目指す社会像」について語り合い、そのために必要な教育の転換を起こしてゆければと思います。社会は与えられるものではなく、つくるものです。教育もまた、ひとつの正解があって、それを与えられるものではなく、私たち自身がつくっていくものだと思います。エコのもりセミナーがやってきたことは、教育や、社会や、里山やメディア、エネルギーシステムや経済システムなどを「自分たちがつくってゆくもの」としてとらえてゆくプロセスだったと、思いました。